

〔思うままの記〕

ゴールド・メダリストの想い出

高堂 俊彌



小生がレスリング部の顧問を仰せつかってから、いつの間にか40年が経った。就任初期の昭和30年代はリーグ常勝の黄金時代として多くの名選手と出会うことができた。全米

選手権の優勝者や入賞者達を身内から生み出したことは、この頃の誇りであった。

1. マット・サイドからの声援

そうした諸君のなかで頂点に立ったのは何といても市口政光氏（昭和37年文学部卒・東海大学体育学部教授）の存在である。（以下、学生時代のまま、市口くんと呼ばして頂く）。同君はもちろん関西のリーグでは無敵の実力を持っていたが、当時の松井清監督の指導でグレコローマンの技術を磨いてからは、またたく間に全日本レベルの実力を発揮し、昭和35年のローマ・オリンピック日本代表に選出されるまでになっていた。結果は7位にとどまったが、時に同君3年次生の夏である。翌36年には、4年次生としての最後のシーズンにキャプテンをつとめることになったが、同年秋のソ連・欧州遠征に参加して、8勝1敗の好成績をあげている。忘れもしないこの時は、卒業試験を控えた暮れの遠征であったため、心配して

是非教科書を持って行って、暇な折にふれて受持ちの先生に質問や近況報告をやるようにと勧めたのだったが、その通り実行されたかどうか。それにしても教科書持参で遠征に参加した代表選手など他にいなかったのではないか。小生の手元にある11月20日付のモスクワよりの便りを見ながら感激を新たにしている。

さて、卒業の年（昭和37年）はもっとも脂ののりきった時のようであった。全日本選手権と全米選手権を征した市口君は余勢を駆って、その年の世界選手権大会とアジア大会のチャンピオンに輝いている。こうして翌々39年の第18回オリンピック・東京大会に満を持して臨んだのである。

この年10月10日に開会した東京オリンピックのうちレスリングのグレコ競技は16日から19日にかけて、新装なった駒沢体育館で熱気にみちて開催された。本学からは松井清総監督をはじめOB諸氏も大会役員や運営委員として参加されていたので、小生も急遽上京して応援にはせ参じた。光栄にも松井大会役員のお蔭でマットサイドの大会役員席から声援することができた。その熱狂ぶりはNHKテレビのカメラ・アングルにとらえられていたことと思う。

さて試合の経過は、予想どおりに相ついで強豪を倒した市口君が遂に最終戦で得意の投げ技を連発して彼らしく見事に優勝を飾ったのであった。同僚に担がれてマットサイドを一周するゴールド・メダリスト市口君の照れながらも誇らしげな勝者の顔を眺めながら、声援のかいがあったことよ

りも、このときほど顧問冥利に盡きるおもいにひたったことはなかった。

2. 金メダル後日譚

それは同年10月末か11月初旬の某日であった。この日、商学部定例教授会開催日のため出校していたら、突然、市口君から優勝の報告と挨拶に伺いたいとの連絡を受けた。すでに教授会は始まっていたので、あわてて同席の同僚に相談したところ、またとない機会だから、是非皆のまゝで披露して欲しいということになった。そこで早速学部長にお伺いをたてた結果、教授会を休憩（中断）

にして皆で祝意を示そうときまり、あわてて市口君にお願いして教授会の席へ招き入れた。小生からの簡単な文学部OB市口君の紹介と同君の挨拶のあと、代表して学部長からどのようなお祝いの言葉があったのかは、今はもう忘れてしまった。ただ、全員の注目は持参した金メダルであったので、学部長から順番にリレー式に手渡しで実感してもらったことを覚えている。なかでも印象深かったのは、日頃から謹厳な風貌を崩さず、どちらかといえばスポーツに冷やかであった某老先生が、このときばかりは、自らメダルを首にかけて、しばし相好を崩されたことであった。

（関西大学レスリング部顧問・商学部教授）

マメ知識

国際レスリング連盟は、一九八七年に創設七五周年を迎えた。呱呱の声は、一九二二年に遡ることになる。

レスリング競技は、古代オリンピックの主要種目だったことを継承して、一八九六年開催の近代オリンピック第一回アテネ大会以来の伝統種目である。その当初から、一九一二年開催の第五回ストックホルム五輪までの間には、レスリング競技の統一ルールが存在していなかった。そこで、このストックホルム大会に参集してきた各国役員の議論で、翌年の一九一三年のベルリン会議で「ルール統一を行う」という確認が成立して、現在の国際レスリング連盟の母体となる国際同盟が結成されたのであった。

一九一三年のベルリン会議には、ドイツ、デンマーク、フィンランド、ロシア、オーストラリア、ボヘミア、スウェーデン、ハンガリー、イギリ

スの九ヶ国から代表者が集まって、つぎの基本事項を決定している。

一、名称を、ドイツ語表記「国際アマチュア重競技協会（IAV S）」とする。

一、公式用語はドイツ語とする。
一、加盟競技種目を、レスリング（グレコローマンスタイルのみ実施）、投擲競技とする。

国際レスリング連盟の前身は、複合競技団体だったことになる。もちろん公式用語に、ドイツ語を使用したのは、当時の、国際情勢が影響している。

一九二二年、IOCが、各競技団体は独立した連盟を結成すべきであるとの勧告を発表することになった。これに触発されて、英語を公式用語とする「国際アマチュアレスリング連盟（IAWF）」が独立して誕生したのであった。

◇

「マメ知識」欄は伴義孝著『スポーツ思想の誕生』を援用しています。

〔思うままの記〕

“カイザー関大”を目指して

東 維明



私とレスリング部との出会いは、昭和24年（1949）の夏、関大では1年先輩だった故山本雅之氏（小学校では、私の、2年後輩）から、「来年、自分は卒業するので、後任としてマ

ネージャーをやってくれないか」と頼まれたことがきっかけでした。爾来、屢々、天六学舎内の練習場へ足を運ぶようになったのである。

ちょうど、その年の秋、東京で第4回国民体育大会が開催され、戦後初めて夜間の開会式が明治神宮外苑競技場で行われた。レスリングは青山のレスリング専用体育館で行われ、大阪代表として団体戦に参加したのは、当時関大監督で、その後も長年にわたり関大レスリング部のお世話をしていただいた明大OBの村田さんがフェザー級で、そして我が関大からは下村（現・木村）君がウェルター級、押立君がフライ級、そのほかバンタム級では明大OBの井削さんが、ライト級では同じく明大OBの富永さんの合計5名でした。それぞれが熱戦を繰り広げた結果、全国第3位となって上位入賞を果たし、同行の小田原先生（元大阪市立中学柔道教諭）、永田先生ご夫妻（大阪玉造で柔道場を経営され、創部当時は、ここが練習場だった）、山本雅之さんと共に喜びを分かち合ったことはいまでも記憶に新しい。これが、私の、レス

リング部員としての対外的活動の公式スタートだったと思う。

戦後の日本スポーツ界は、水泳を除き、ほとんどの競技が国際舞台への参加を禁止されていた。ところが昭和25年5月に体操が解禁されたのを皮切りに、同年7月にはレスリングも逸早く国際大会への参加が認められるようになった。その戦後第1号の日米対抗レスリング関西大会が酷暑の7月27日、甲子園プールの特設リングで華々しく開催された。全日本代表選手として出場したのは、前述の明大OBの村田さんがフェザー級で、ライト級は下村君、フライ級は押立君などで、各選手とも文字通り死闘を展開し、甲子園プール特設リングはまさに興奮の坩堝と化したのであった。押立君は、このとき、ロンドンオリンピック大会銀メダリストのクリステンセンにフォール勝ち寸前で、タイムアウトになり、惜しくも判定勝ちとなったのであるが、彼は、その勝利の「判定」がでた瞬間に、失神してしまったのであった。一同がマットに駆け上がって押立君を介抱して、嬉し涙を共にしたことは半世紀を経たいまも強烈な印象として脳裏に焼きついている。

またこの年昭和24年のリーグ戦では、連破の夢は果たせなかったが、春と秋の優勝を関学と分け合い、爾来、我が関大の黄金時代には、関大と関学がいつも春秋の覇者を分け合うという展開となっていた。翌昭和25年春大阪YMCAでのリーグでは、接戦の末、見事に優勝を成し遂げ、カイザー関大の名を世に博したことや、また同年9月、

神戸のYMCAで開かれた全日本学生選手権大会で、下村君がライト級で出場し、同級チャンピオンの明大霜鳥選手を倒したことなどは、忘れることのできない、大きな喜びである。

一方で、悔し涙を流したことも何回かあった。特に昭和25年の秋、東京で行われた全日本大学王座決定戦で、関東の覇者中央大学に僅少差で敗れたことなど悲喜こもごもの思い出が懐かしく、こ

れらはすべて私の大切な青春の一頁として心の深奥にしっかりと刻まれている。

どうか今後とも、“カイザー関大”を目指して、現役諸兄が、ますます健闘されることを只管祈念してやまない。関西大学レスリング部50周年を、皆様と共に、衷心よりお慶び申し上げます。

(昭和26年卒)

マメ知識

レスリングのルール変遷史を概括しておきましょう。

◇

一、一八九六年第一回アテネ・オリンピック大会 ↓

体重制はなく無差別級の一階級のみ実施。時間制限なしでいずれかのレスラーが相手をフォールするまで闘った。このころ国際的な統一ルールは存在しなかった。

一、一九二二年第五回ストックホルム・オリンピック大会 ↓ スカンジナビア諸国の統一ルールを適用。国際レスリング連盟が一九九二年のバルセロナ五輪まで採用していたレスリング競技方式の原点的な「二試合敗者消去方式」をこの大会から採用。消極的レスリングに対して警告失格に処するルールはこの時

代に既に確立していた。そしてこの警告失格ルールは長らく中断されるものの、一九八七年のルール改正から再び採用されることになる。七階級の体重制。試合時間は「三〇分ごと判定制」で、明確な判定材料のない場合、三〇分の延長が何回も繰り返される。ただしいずれの時点であつてもフォールが成立した時点で試合は完了。

一、一九二三年ベルリン会議 ↓ 七階級の体重制。試合時間は「二〇分×2」制で二ピリオド間に一分の休憩を設けた。国際ルールとして統一。一、一九二〇年第七回アントワープ・オリンピック大会 ↓ 七階級の体重制。試合時間は一〇分間でその間にフォールが成立した場合にのみ試合は終了し、フォールが成立しない時は五分の延長

戦。その延長戦でフォールが成立しない場合は、再度の延長戦を行って最初に相手を押さえこんだレスラーを勝者とした。このころまだ一九二三年のベルリン会議で決議した国際統一ルールは厳格に守られていなかった。

一、一九二二年国際アマチュアレスリング連盟(英語表記)の設立後 ↓ 六階級と七階級の体重制。試合時間は二〇分間。フォールが成立した時点で試合は終了。二〇分間内に決定的な材料のない場合は「二分×2」の交互に行うグラウンド・レスリング(寝業専門のレスリング)の延長戦を行う。

一、公式ルール・ブックの誕生 ↓ 一九二八年のアムステルダム会議で。

(続く)

〔思うままの記〕

共助主義のめばえ

宇賀大三郎



世の中に3大演歌といわれるものがあります。「酒よ」「津軽海峡冬景色」「氷雨」です。このなかで、「酒よ」の歌詞に、“心にもいくつかの傷もある”という文句があります。

関大レスリング部50周年史ですから、恰好の良い褒め言葉ばかりの記事の列举にせねばと存じますが、一つくらいは、碎けた失敗の歴史があっても良いのではないかと自分勝手に思い込み、私の「傷」の部分を書き連ねるご無礼のほどを、同窓の誼で、お許しくださるようお願い申し上げます。

いまから思うと、勝った負けたと言いながら、あんな野蛮で格好の良くない「競技」を、明星高校出身のクリスチャンであり、やわなボンボンであった私が、よくやっていたものだと感心します。しかしその当時は、レスリングだけがスポーツであり、それ以外はスポーツでないと思ひ込んでいたのも間違いない事実であります。

ちょうど、横山主将、坂副将を中心とした関大レスリング部の黄金時代であります。同窓の皆様も一度や二度は覚えがありますように、私も初恋に破れやっと傷心が癒えなかったときであります。これほど惚れた「女」を諦めたのだから、私も敬虔なクリスチャンからサタンに変身して、いっちょレスリングでやるだけのことはやってみ

ようという気になりました。可笑しいもので、そうなると見栄も外聞も捨てる事が出来るものですね。恐ろしいことです。

さて昭和31年の春の合宿が京都の永勸堂というお寺で行われ、その物語は、中休み（一日間）のときに始まりました。南禅寺で行われたお茶会のお手前券を、どうして私だけが持っていたのか、これは未だに永遠の謎であります。話によると、そこには銘菓といわれる和菓子がうずたかく積まれてあるとのことでありました。当時の時代背景は終戦後の混乱から立ち上がり、日本は、貿易立国として歩みはじめ少しずつ「物品」も世に出回り、街行く人びとも服装の流行を気にしだした頃でありました。ところが、このような世間とは隔離された別世界があったのであります。教養と鍛え抜かれた体を持ち合わせ、何か食するものがないかと目だけぎょろつかせていた世界、それが京都の永勸堂にたむろする関大レスラー軍団であったのでした。そこに一人のヒーローが誕生したのであります。そのヒーローの計画は南禅寺のお茶会のお手前へ出席して、そこのお菓子を失敬してきて、我が同胞に喰わせれば、どんなに喜ぶだろうということであります。ヒーローは、着物の代わりに寝巻に帯をしっかり結び、下級生2人を供に従えて出陣となったのであります。

南禅寺のお茶会現場では、まさに竜宮上であります。着飾った乙姫様がしずしずと歩いております。琴の音が流れています。何ともいえない厳かな雰囲気であります。周りにはいろいろな和菓子

がいろいろな形になぞらえて飾られています。寝巻で正装したヒーローは、まずお茶のお手前を表千家の流儀にのっとって受けたのであります。お供の2人はヒーローの教養の深さにびっくりした顔をして、口をパツクリと開けて眺めております。

お手前を受けたのち、さすがにヒーローも、どうしようかと一瞬迷い心が起きたのであります。もう一つの心に、永勸堂にたむろする仲間の青白い顔が浮かんできますと、その迷いも消えてしまいます。ヒーローは黙って、お供2人に、飾られた和菓子を目指します。たちまちその「形」が崩れて行きます。それを見た乙姫様たちが「あゝ」と言って指を差しています。お供の2人は悪鬼の形相で睨みつけながら、狙いの品物を、持参の袋に詰め込みます。そして山盛りの「菓子の宝」を持ってヒーロー「桃太郎」は、お供2人と、永勸堂に凱旋してきたのであります。

あとは、皆様方の想像どおりであります。この物語を読まれてどのようにお感じになられたでしょうか。盗人ただけしいですって!!。判ります、そのとおりです。深くお詫びいたします。しかし、諺に、「盗人にも3分の理」、いや5分の理ということがございます。

現在、世界中の国が問題を抱えて混迷しておりますが、何故でありましょうか。これは癖のある私の偏見であります。これからの将来は、「何の主義がよいのか?」と迷っているからだろうと思います。共産主義は悪平等だから駄目だということになりました。しからば、資本主義はどうかということになりますと、これも現在個人のエゴ（自分だけ良ければよい）がむき出しになり危機に瀕しています。これから（未来）の主義は、同じ物差し（同じ目的）をもって互いに助け合って行こうという「共助主義（思いやり主義）」が、必ず台頭してくるに違いないという予感をもっています。

その兆候は、既に昭和31年の春の京都の永勸堂と南禅寺で起こった「怪盗事件」を通じて、神が人間に暗示したのだと思っております。いまにして思えば、石川五右衛門と同じというのは言語道断であります。しかしそれを見ていた乙姫様たちは“なんと可愛い五右衛門よ”という優しさの心で許してくれたのだと思います。いやそうでなくて、レスリングというスポーツに賭けた男「五右衛門」の美学の気魄に吞まれたのかもしれませんが。

（昭和32年卒）

マメ知識 続「ルール」

一、二〇分間時代への収斂 ↓ 一九三六年から。一〇分のスタンド・レスリング＋三分のグラウンド・レスリングの交互試合＋四分のスタンド・レスリングに。いかなる時点であっても、フォールの成立時点で試合は終了。ハンガリー方式の「バッド・マーク制」（二試合敗戦者消去方式）の登場。

一、ハンガリー方式の修正 ↓ 一九四八年の第一四回ロンドン・オリンピック大会前後からハンガリー方式「バッド・マーク制」を修正。一五分時間時代。「六分のスタンド・レスリング＋三分のグラウンド・レスリング交互試合＋三分のスタンド・レスリング」制に。いかなる時点であっても、フォールの成立時点で試合は終了。

（続く）

〔思うままの記〕

小意見と提案

西脇 義隆



この意見は他の大学、高校の競技部、また各々のクラブに対しては一切論じてはおりません。あくまでも、関西大学体育会レスリング部とその関係者のみを対象として申し上げる

意見であります。念の為に。

横眉冷対千夫指 俯首甘為孺子牛 魯迅

今年も5月の末日頃、「関西大学レスリング部OB通信」と題する主将からの一通の封書が、小生宛に送られて来ました。春の西日本リーグ戦は2部リーグ8大学中7戦7敗の最下位で終了した内容でした。もう既に10年以上もこのような内容の封書が5月と11月頃にほとんど似た内容で送られて来るのです。そこにはスポーツマンとしての、雄々しさも凛々しさも勇気も闘士も自信も、そして悔しさ無念さ恥ずかしさなど、微塵も感じられないのです。一体これはどういうことなのでしょう!!! この封書を届けてくれる、彼ら（若者）を、ここまで突き落とし、はい上がれなくしたのは誰なのでしょう、何なのでしょうか……。

平常時は意識していない、普段はほとんど忘れていたといったほうが正しい、そのような自覚であり、意識であります。しかし、一旦なにが事が

起こり、それに対処せざるを得ない難しい問題に直面したとき、なんとなく自然に湧き上がってくる、本能的なその自覚と記憶と意識が目覚め、おのれを支えてくれる、小生にとっては非常に大切な心豊かな意識なのです。これこそ我が関西大学レスリング部の4年間のそれなのです。

大先輩、先輩に指導を頂き、同輩、後輩に練習、稽古と芯から汗を流した心身鍛練をし、試合に臨んだ意識なのです。新人時代は負試合を重ね、悔しい思いをバネにして、時には勝試合につなげる。勝つことのうれしさと誇らしさ、どのような小さな試合であっても、男同士のぶつかり合い、ためしあいの結果の貴さだと思うのです。そして、それは単にレスリングという一競技のことを言っているわけではありません。すべてのスポーツに関して言えることなのです。しかし、小生はそのなかでも紀元前の歴史を有するレスリング競技に特に意義を感じるものなのです。勝負、試合ですから負けることも度々あるでしょう。それは当然です。しかし、競技であるかぎり勝利すること、勝つことが特に大切であり、有意義であり、最も重要なことも十分に理解し、試合に臨むべきだと考えます。負けることの無念さから得る素晴らしい教訓、それをバネにして鍛練、練習、努力する男らしさ、スポーツマンスピリット。その結果、次の勝ち試合につなげてこそ、負けの意義が生きてくるのです。全力を振り絞り勝ちを得たときのうれしさ、誇らしさ、心の底からの喜びを感じるのです。これが先に申し上げた意識なのです。この意識がの

ちの社会人としての生活に素晴らしい活力、エキ
スとなって生きてくるのです。また、かけがえの
ない人生にとって、時には大きな支えとなってく
れるのです。これが意識なのです。

これを一通の封書を季節ごとに送り届けてくれ
る若者たちにどうして教えてやれないのでしょう
か!!! 毎シーズン最下位あたりを悲しげにウロ
ウロし、その現実のあった時点のみ反省したよう
な顔をし、その気もないのにうつろな意味のない
奮起するような言葉を吐き、すぐ忘れ、また負け
のみを重ね、再度同じことを繰り返す。(東大、
京大の野球部とはまた意味が違いすぎる。) 一体
これまでに誰がしたのか? 真の努力(練習)でな
い怠惰な努力(練習でない練習、稽古でない稽古、
鍛練でない鍛練)を繰り返し、反省もなく続ける。
どうして本当の真のレスリング競技を、意義を、
教育者として、教えてやらないのか。それをまっ
たく知らない若者(現役)は可哀相すぎるではな
いか。すぐに、日本社会が豊かになり、ハングリー
さがなくなり、ほかに楽しいことが多すぎる、若
者はこのような厳しい鍛練を必要とするスポーツ
には寄りつかない、社会現象が原因だとか、大学
にスポーツ推薦入学制度が少なすぎるとか、と言
う。これらの諸現象が、我が関西大学レスリング
部を弱くする原因などと言って平然としているの
は誰なのだ!!! そんなことが、あるものか。

西日本学生レスリング連盟の加盟チームもどん
どん増えており、参加人員も増大しているのです。
また、卒業してからの企業に就職すれば、どれほ
どの努力と頑張りを強いられるか、必要とするか。
企業内では終身雇用制度は消えつつあり、能力主
義制度が採用され、非常に厳しく、それぞれに努
力を続ける精神力を欠くことのできない時代が来
ているではないか。それを考えてみれば、レスリ
ング競技はどの見地から見ても、最も人間鍛練の
教育にふさわしいスポーツだと言えるのではない
だろうか。いや! 自信をもって言う。レスリング

こそ、最高のスポーツなのだ!!!

そこで、小生は提案をしたいのです。この目出
度い創部50周年記念を期して、「関西大学体育会
レスリング部を強くする会」を結成することを提
案したいのです。その目標とコンセプトは、つぎ
のとおりです。

- ① 西日本リーグ優勝。
- ② 2008年の大阪オリンピック大会の出場選手
を育成する。
- ③ 中企業か大企業の代表取締役社長をレスリ
ングOB会メンバーより2、3人輩出する。
- ④ 期限目標を向こう15年間、2012年とする。

今のままの考え方の指導陣、OB会の在り方では
いけないと考えます。しかし、大学内に所属す
るレスリング部と外側のOB会や協力者と、どの
ように協力接点を求め結合するか。検討課題や難
問題が山積みだとは思いますが、とにかくスタート
したいのです。賛同願えないでしょうか。レス
リング部を強くして、素晴らしく立派な関西大学
卒業生の社会人を世界に送りだすのです。これこ
そ我が関西大学体育会レスリング部であり、関西
大学レスリング部OB会なのです。必然的に大学
内の担当者とOB会ほかの協力者などが、どうし
ても、現状からの脱出をするための意志統一を必
要とします。十分に話し合い、検討するのです。
とにかく実行に移すのです。そして、創部51年よ
り、新関西大学体育会レスリング部の存在を、日
本に、世界に、知らしめるためにしっかりと確立
したいのです。単なる男のロマンと笑うなかれ!!!
もう一度、謳う。

横眉冷对千夫指 俯首甘為孺子牛 魯迅

よしたか

関西大学体育会レスリング部創部50周年、心か
らお慶び申し上げます。

(昭和34年卒・レスリング部OB会副会長)

〔思うままの記〕

私と指導者

市口 政光



市口さんの「年賀状」

私がレスリング競技を始めたのは1958年の関西大学に入学してからである。以後1964年の東京オリンピック大会で優勝するまで約7年間の競技生活を送った。

れのオリンピック大会の感激が動機である。

2. 関西大学時代の先輩と監督

大学入学後、初めてのレスリングの手ほどきを受けたのは、西脇主将（全米選手権大会優勝）である。先輩は、すさまじい情熱家で、人情味があって、何か人を引きつける指導力を持っていた。夏の強化合宿は四国の徳島でおこなわれたが、その頃、日本大学も同じ場所で合宿をしていた。日本大学が終わる頃、我々の大学が合宿することになっていた。私と同級生の福家君の2人が、特別に参加することになった。これも西脇先輩の厚意によるものである。3日間ではあったが、私達にとっては初めての経験であった。関東の新しい技術や体験など、得るものは実に多く、また見る目を充分に養えた。私は、いまでも先輩の先見性に深く感謝している。

私が2年生になる頃、新監督として佐々木先輩（大阪信用金庫勤務）が週に1回指導に来てくれた。佐々木先輩は、温和で、やさしい人柄の先輩で、何事にも熱心に指導してくれた。その成果として、2年生で関西選手権大会に優勝できた。このときは、大変に喜んでくれたのをいまでも覚えている。

3. ローマ・オリンピック大会

1960年の7月ローマ・オリンピック大会の最終

1. 動機と出会い

私のレスリングとの出会いは偶然である。高校2年生で柔道をしていた頃、練習の帰り道に、大阪難波の地下鉄を通りかかると、メルボルンオリンピック大会（1956年）のニュースが入ってきた。地下鉄の壁「新聞」に日本選手団の活躍ぶりが出ていて一瞬そこに釘付けとなりニュースを熱心に読んでいた。この時、初めてオリンピック大会にレスリング種目があるのだなア…！、と知り興奮したものである。その後NHKの座談会で、メダリストの紹介やレスリング選手の談話を聞いたことがあった。話の内容や試合のフィルムなどは詳しくは覚えていない。しかし、ゲストのメダリスト（笹原、池田、笠原選手など）の記憶は決して忘れることなく脳裏に焼きついている。後年よもや、この人達のご指導を受けるとは思いもよらぬ出会いであった。

大学進学のと期となった。私は、迷うことなく、レスリング部のある大学を志望した。やはり、憧

予選会が東京で開催された。この試合のために上京したのは、選手の私と一年後輩の伴君（現関西大学教授・国際審判員）の2人だけである。伴君は私の身の回りの世話をする付け人役とコーチ役を引き受けてくれた。この試合は予想外というか、私が優勝してしまった。レスリングを始めて2年3カ月のスピード達成で、信じられないことが起こったといえる。奇跡ともいえるオリンピック日本代表である。オリンピックは夢であり、憧れであり、そして、目標としていただけにその感激は忘れられない。日本代表となった私は、（日本協会）副会長の松井清氏（関大OB）、理事長村田恒太郎氏（関大初代監督・明大OB）に暖かく迎えられ（注・両者の役職は筆者執筆当時）、以後、お二人は世界に広がっていく私の支えとなって、また長く指導者として、導いてくれた。（ローマ）オリンピックで、日本レスリング選手団は金メダル、ゼロ。このときは、全員丸坊主で帰国した。私の成績も7位という結果にあまじた。

4. 東京オリンピック大会へ

1961年世界選手権大会が横浜で開催された。私も日本代表に選ばれて出場したが、結果は惨敗で、散々たるものである。伸び盛りの私にもいい体験であった。経験不足と、精神力の弱さから、勝負

のきびしさなど、多くを学んだ。

私が大学を卒業する頃、松井清氏を通じ笹原正三氏の紹介で、東京の会社に就職することになった。東京生活では、笠原コーチの指導している明治大学で毎日練習することになった。それからの2年6カ月間は、強化合宿とレスリング漬けの毎日が始まった。

八田一朗会長、笹原正三コーチ、笠原茂コーチには、徹底して基礎体力、きびしい練習、技術の指導、そして精神力をたたき込まれた。その成果は以下のとおりである。

1962年	世界選手権大会	57kg	優勝
1962年	アジア大会	57kg	優勝
1962年	全米選手権大会	57kg	優勝
1963年	東京国際スポーツ大会	57kg	優勝
1964年	東京オリンピック大会	57kg	優勝

社会人になって初めて世界選手権大会に優勝、そして東京オリンピック大会優勝までの、多くの指導者に対し感謝の気持ちでいっぱいである。私も今後とも指導者として努力していきたい。

（昭和37年卒）



本稿は雑誌『体協時報』（日本体育協会・1990年5月号）に載った市口さんの「手記」です。編集の都合で小見出しほかに若干の修正を施しました。ご了承ください。（編集部）

マメ知識 続「ルール」

一、一二分間時代 ↓ 「六分のスタンド・レスリング＋二分のグラウンド・レスリング交互試技＋二分のスタンド・レスリング」制に。いかなる時点であってもフォールの成立時点で試合は終了。一九五六年第一六回メルボルン・オリンピック大会直前より採用。

一、一〇分間時代 ↓ 一九六四年一月から採用。「五分のスタンド・レスリング×2」制に。二ピリオド間に休憩一分間を適用。いかなる時点であってもフォール成立時点で試合は終了。八階級の体重制。

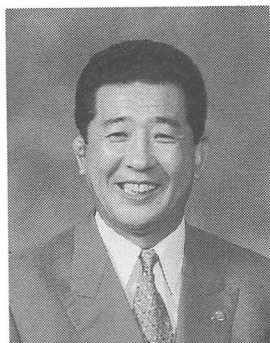
一、九分間時代 ↓ 一九六八年一月から採用。「三分のスタンド・レスリング×3」制に。三ピリオド間に一分の休憩二回を適用。いかなる時点であってもフォール成立時点で試合は終了。一〇階級の体重制。高地対策としてメキシコ五輪用に改定。

（続く）

〔思うままの記〕

関大精神で頑張る

松浪 啓一



関西大学を卒業してはや35年が経過した、昨日のような思いである。私は高校時代、柔道をやっていました。大学で何かしなければいけないと思っていた。当時、我が国はプロレスリ

ングの創成期で力道山がアメリカからルーテーズらをよんできて興業をうっていた。柔道の木村対相撲の力道山の死闘も見た、柔道をやっていました。私にとっては、あっけない幕切れであった。「雄牛もいつかは倒れる」ものである。

そのようなことに感化された私は伝統あるレスリング部に入部した。同輩には、市口、福家、松田、高田、荒武、神谷、岸田、桂などそうそうたる腕自慢がそろっていた。市口は東京オリンピックで金メダルを獲得した。福家も実力では金メダリストと同等の力量をもっていたが、怪我などの故障が重なり残念であった。後輩では現在レストラン・インディアンサマーの社長をしている山本が日体大の花原選手（東京オリンピック金メダリスト）と日本代表最終選考会の決勝で対戦し惜敗したが、彼も世界に通じる名選手である。

我が関大レスリング部の練習は尋常ではなかった。まず練習前にのぼりおりの多い坂道を5キロメートルほどランニングして、その後、うさぎ跳びを100メートルほどしてから、そのまま立たずに

階段をまたうさぎ跳びで20段ほど飛んであがる、それから練習に入るのである。スパリング前に腕立て伏せ、腹筋やブリッジなどなんと100回もやるのである。だからスパリングに入るころはもうふらふらであるし、そして時間にも制限はなかった。合宿など半分死んでいたようなふうで、朝食前、昼食前、午後と、そのようなことが1日3回繰り返されるのである。その甲斐あって、西日本リーグ戦では春秋とも連戦連勝をした。何と言ってもリーグ戦が最大のイベントである。我々の時代はメンバーが揃っていたので黄金時代を築くことができた。いま振り返ってみると伝統はスパルタ式練習と勝利によって出来るものであると思う。人生には栄枯盛衰があるが、そういう意味では我々の大学生活も青春も本当に充実していた。これもすべて諸先輩が敷かれた立派なレールの上を我々が脱線せずに走ったからである。だから私は常に先輩諸氏に感謝している。「ローマは1日にしてならず」というが、そのとおりである。

私は卒業後、会計事務所を経営しながら、父の意志を継ぎ、政治を志した。地元の方々、諸先輩、同窓生、親愛なる後輩の皆様方の絶大なるご支援により現在、大阪府議会議員を務めさせてもらっている。弟の健四郎も昨年、皆様のご支援のお蔭で衆議院議員に当選させていただいた。これも一重にレスリングをやって培った強靱な精神力の賜物であると思っている。この紙面をお借りして兄弟両名が当選させて頂いた御礼を心から申し上げます。

中国の詩人杜甫は「国破れて山河あり、城春にして草木深し」という有名な詩をつくったが、私はこの詩を教訓として心に秘め、「奢る平家は久

しからずや」をモットーに、今後とも関大精神で頑張って行こうと思っている。（昭和37年卒・レスリング部OB会副会長）

マメ知識 続「ルール」

バッドマーク方式 ↓ これま

での試合方式は、途中で「バッド・マーク方式」から「勝点方式」にその名称を変更したことはあったものの、伝統的な方式は一貫してきた。それこそは、レスリング競技方式の特徴であるといえて、一つのスポーツ文化の傑出した作品であった。そしてこの方式は、一九二二年のストックホルム・オリンピック大会から、引き続いて、ずっと基本的に採用されてきたものであった。

一、まず抽選で、一から順番の整数で、全出場者の番号を決める。一回戦の対戦相手は、一番と二番、三番と四番というふうに順次組み合わせる。最終番号で組み合わせのできない者は不戦勝となる。
一、二回戦は、一回戦で不戦勝者が存在した場合、その選手

が「一番」の上に繰り上げられて、その不戦勝者と一番、二番と三番というように順次組み合わせる。一回戦で不戦勝者のないときは、一番と三番、二番と四番という手順で、原則的に、上位番号者が最直近末対戦者と対戦する。

一、選手はこの手順で試合を行行し、二回の敗戦を被るまで試合続行の権利を有する。

一、二回負けた選手は失格となり出場権を剥奪される。

一、この手順で、三名の選手が残るまで予備戦を続行する。

一、勝ち残った三名で決勝戦を行う。決勝戦は総当たり戦であるが、いずれかの組み合わせが既に予備戦で終結しているときは、その結果を決勝戦の総当たり戦に充当する。

一、優勝者は、三名の総当たり戦の結果、最も「バッドマーク」の少ない選手に決定する。

一、二位は、優勝者が決まった場合、その他の二名の直接対決の勝者となる。

一、バッドマークは、フォール勝ち「0」、判定勝ち「1」、判定負け「3」、フォール負け「4」。

一、四位以下の選手の順位は、決勝戦から順次逆上る「予備戦」でバッドマークの少ない順に決定する。

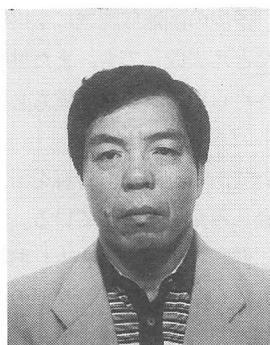
このバッドマーク方式は一見複雑に見える試合方式であるが、実に合理的にできている。そればかりでなく、試合進行において知的作業を選手も要求されて、レスリング通には好評であった。

しかし難点もなくはない。対戦相手の特定が大衆などに判りがたいことである。この難点は特にマスコミ対策に弱かった。そこで一目瞭然の「トーナメント+敗者復活戦複合方式」が一九八九年から採用されたのである。（続く）

〔思うままの記〕

「青春」を楽しもう

佐藤 秀雄



「青春」。それは
いまから30年以上も
前のことになるが、
我々の熱き姿は確か
にそこに存在した。
大学時代の4年間は、
ひとつのことを
目標に突き進んだ。

勿論、学業の苦から

も逃れることはできず、卒業という目的のために
適当に対処したが、いずれにしても二重苦を背負
っての学生生活に、楽しい思い出は少ない。西
日本学生リーグ戦優勝、それは関大レスラーの避
けることのできない宿命のようなものであった。
当時のことをいま思うと、何故それほどまで熱く
なれたのか、不思議である。同世代のメンバーと
しては、中野主将、山本、井加田、住谷、加藤、
佐藤と錚々たる熱血漢が揃っていた。リーグ戦優
勝そのことだけに集中しつづけた結果、我々が2
回生のときから、連勝記録が始まり春秋12連勝と
なった。伝統を守り、そして苦しい練習に耐え、
その見返りとして手にした優勝旗、優勝カップは
何物にも代え難いものであった。京都四条河原町
を「肩」をいからせ、闊歩した姿が、遠い昔のこ
とでなくして、ほんの数年前の出来事のような気
がする。辛い練習にも耐え流した汗や、涙は、努
力することによって報われる。我々は青春時代に
貴重な体験を得たと思う。

社会人となって長い年月が経ったいまも、苦痛

でさえあったはずのレスリングを思い出す。結局
のところ、苦しかった当時のいろいろな出来事が
いまの「自分」の基礎になっているからこそ、「自
ら」が存在するのではないか。現在では、そんな
気がするのである。

当時に比べれば、現役レスリング部員は、少し
可哀相な気がする。スポーツ推薦入学も復活した
が、レスリング部まで、その杵が回ってこないの
が現状である。そんななかでも日々練習し、少し
でも期待に応えようと、運動部に入部するものが
限られているなかであって、頑張っている現役部
員に対して評価するものである。しかし、先輩O
Bの変わらぬ熱い情熱を現役諸君が幾分かなりと
も受けとめ、現状に満足せず、努力を重ねてより
一層の成果を上げていただきたい。

現在は、少子化社会である。受験勉強に小さい
頃から明け暮れ、親は過度に子どもに期待し、子
どもはそれに応えようと努力する。親子の関係も
どこかぎこちないし、何かの弾みでとんでもない
方向に進んでしまう。そのようなさまざまな状況
のなかで、子どもは成人し、社会人となって巣立っ
ていく。しかし、何か欠けていると思う。志望
校に入り、一流会社に就職し、会社人間になる。
これもいま流行の生き方かもしれないが、何か疑
問を感じるの、小生だけだろうか。何かに、挑
戦してもらいたい。スポーツをするもよし、ボラ
ンティア活動をするのもよし、汗を流し、泣いた
り、笑ったりと、……「つまずいたっていいじゃ
ないか、人間だもの」(相田みつお)……。2度

とない青春を悔いのないように過ごしていただきたい。小生は、いまそういう意味で青春を味わっている。

「学業」と「仕事」。これは全然異質なようであるが内容は通ずると思う。小生自身は余り勉強もしなかったが、それなりに自由を楽しんだ。しかしいまの若い人達は、特に高校生迄は、かけがえもない時代に勉強・勉強と追われ、余りにも自由が無いような気がする。当たり前のことだが、運動部に入ると練習もしなければならぬし、小生の事例で言えば、いつもその練習を機軸にして何かに束縛されているそんな気がした。それなりに時間もあることはあったが、実感としては乏しい。その当時と現在を比較して考えてみると、「学業」と「仕事」とは、常に追われるものとの印象を持つ。そこで小生は、「仕事」について、最近考え方を少し変えてみた。相田みつお氏の言葉を噛みしめ、「学業」と「仕事」は、楽しむためのものであると考えるようにした。すると、どうだ

ろう。いままで何かつかえていたものが取れたように肩の力が抜け、楽になった。

人の生き方、そしてその一生はさまざまである。ならば楽しく、そして愉快地に、他人に迷惑を掛けない範囲で、それなりの人生を送ってもいいのではないかと、この歳にしてやっと思えるようになった。「楽しむ」という意識と行動から、前向きの姿勢が出てくる。これからの時代は、特に不確定の時代に突入する。こんな時代だからこそ、自らの足元を見つめ、多少の困難な課題にも挑戦し、楽しんでみて、たとえ失敗しても、また挑戦したらイヤ、というぐらいのプラス感覚も必要ではないかと思う。

そういう意味において、これからは青春を十二分に味わい、そして楽しみたいと考えている。

最後にOB各位のご健勝ご多幸を衷心よりお祈り申し上げますとともに、関大レスリング部の今後のますますのご活躍を期待しております。

(昭和42年卒・レスリング部前コーチ)

マメ知識

続「ルール」

一、六分間時代 ↓ 一九八一年一月から採用。「三分のスタンド・レスリング×2」制に。二ピリオド間に一分の休憩を適用。いかなる時点であってもフォールの成立時点で試合は終了。一〇階級の体重制。スポーツ・ルールの在り方にテレビパワーが関与し始める。(放送時間との関係で試合の短縮化・制限時間化の検討が始まる。)

一、五分間時代 ↓ 一九八九年一月から採用。五分間の一ピリオド・ストレート制に。規定の時間内に試合の判定がつかない場合は、三分間の延長。ただし延長戦時間内のいかなる時点であっても、規定の判

定材料が生じた時点で試合は終了。一〇階級の体重制。

一、八階級制 ↓ 一九九七年一月から採用。オリンピック大会の肥大化対策の一環で、さらに女子レスリングの定着で、これまでの一〇階級制を八階級に削減。近年オリンピック種目に「ビーチバレー」「サーフィン」などのニューススポーツが採用されるようになり、その参加人員の増大にともなう、削減要求や種目廃止検討が始まっている。レスリングもその煽りを受けて「階級」を減らし、参加全体枠を削減した。

◇

ルールは時代趨勢とともに変わるものです。しかしテレビパワーや金権パワーに影響されすぎるとスポーツは駄目になります。

〔思うままの記〕

感謝・感謝・感謝

北川 俊治



はやいもので我が部を出てから20数年になりました。いまから考えると関西のリーグ戦で優勝した最後の学年ですが、先輩たちが築かれた伝統の余韻が残っていてラッキーでした。

9年前（昭和63年）に脱サラをして何とか頑張っています。商売を始めたとき、溝畑武夫先輩（平成2年にご逝去）から励ましの「葉書」を戴いた。まず、それを披露させていただきます。

北川俊治 殿
御家内 様

九月吉日

溝畑武夫

残暑のみぎり、お見舞い申し上げます。永年勤務の任を解かれ、晴れの自営開業、誠におめでたく、心よりお祝い申し上げます。商いは牛の「よだれ」とか、あきず、たゆまず風雪を乗り越えて頑張ってください。

の思い出を書かせてもらいます。

1. 理解のある先生方へ

実のところ、私は、勉強が苦手と特に英語が全然駄目でした。法学部は2年から3年に進級するとき、英語修得が必須要件になっていましたが、「試験」にフォール負けになり、担任教授の奈良県の富雄の自宅にまで「頼み」に行きました。しかし最初の3日間は門前払いでした。それでも留年決定ですので怯まず4日5日と通いました。みかねてオバアちゃん（実は教授のご母堂）が、とうとう、玄関に入れてくれましたが、それでも取り合ってくれません。

6日目に、富雄からバスにのっていると、教授も乗り込んでこられました。バス停で降りて、教授と並んで歩いていると、幸運にも？不覚にも！私は、なんと縦横1立方メートルもあろうかという大きな穴に落ち込んでしまいました。「英語」のことが気になっていて、迂闊でした。そこに教授が手を差し延べてくれました。そんなことがあって、はじめて、家にあげてもらいました。

「先生！ なんとかお願いします」と必死に頭を何度も何度も下げたところ、「判った。しかし答案用紙はもう事務室に提出してしまったので、修正がきかないかもしれない。そのときは、堪えてくれ」という次第になりました。結果は、「可」で合格になっていました。教授の氏名は忘れましたが、本当に、お世話になりました。

現在もいろいろな先輩に商売の上でお世話になっており、我が部に入って良かったと思っています。感謝。今回は、勉強に勤しんだ、学生時代

英法の原教授には、ほとんど白紙の答案を出してしまいました。これまたお情けで合格にしてみました。亡くなられた刑法の中教授を訪ねて、もちろん「頼み」にですが、岸和田のご自宅まで同期の平池君と一緒に去了したので、教授は困惑気味でした。それでも、教授の誠実なお人柄を垣間見ることができました。それ以外にも、桜田教授……、いまからでは考えられないことで、多くの「教授」先生方には本当に感謝しています。

2. 大学紛争

昭和44年全国に吹き荒れた大学紛争が、我が関大にも押し寄せてまいりました。全共闘に攻められて、体育館を逆封鎖することになり、体育OB会から沢山の差し入れ(おにぎり・巻き寿司など)を貰って、特に下宿生活の運動部員は総動員で、その他駆け出された連中も含めた籠城組は、涙を

流さんばかりの感激ぶりでした。

これを潮に「体育推薦入学制度」が廃止されて、我がレスリング部のみならず、関大体育会が見る影もなく弱体化していく最大の要因となりました。この経緯に関してはいまでも残念でたまりませんが、私個人にとっては福の神となりまして、全共闘連中の大学封鎖が続いたお蔭で定期試験が中止となり、「レポート提出」への切り替えが多くなって、「卒業」の危機一髪を、一転しての大逆転フォール勝ちで、切り抜けることができました。感謝。

とりとめもない思い出を書きましたが、創部70周年までに、神谷さんのような親子レスラーや、西川さんご夫妻のような部員同士の結婚組が、これから、輩出することを切に期待しています。この度の「創部50周年」、衷心より、お慶び申し上げます。

(昭和45年卒)

マメ知識

世界最長時間の試合の記録を
ご存じですか。(編集部)

◇

近代オリンピック史上に残る最長試合の記録がある。一九二二年第五回オリンピック・ストックホルム大会での七五キロ級における、ロシアのクレイン選手対フィンランドのアシカイネン選手の試合がそれである。試合時間は実に延々と十一時間も続いたのあった。しかも炎天下をとおしての試合であった。クレイン選手はようやく判定で勝利を手中にしたものの疲労困憊してしまつて決勝戦を棄権せざるをえなかった。

この同じ大会の八二・五キロ級の決勝戦も九時間に達する大接戦だった。スウェーデンのアウルグレン選手とフィンランドのボーリング選手が

対戦したのであったが決着がつかず特別ルールを適用して両者に銀メダルを授与した。以下がルールである。

一、試合時間は一応六〇分

間(三〇分間の前・後半二回)に決まっている。

一、フォールが成立した時点で試合は終了する。

一、三〇分間にフォールしなかった場合には、三人の審判員の合議で勝者を判定して決定する。

一、相手を投げたりマットに制すれば一点が、相手をニア・フォールすれば二点が与えられた。

一、ポイントの多いほうが勝ち。前半で優劣がつかないときは後半に延長。さらに決着しないときは何回も三〇分毎の延長。

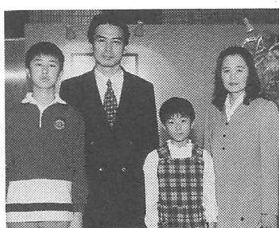
◇

そんなわけで延々と試合を続行したのです。(編集部)

〔思うままの記〕

出会いとは不思議なもの

西川（則包）京子



西川さんご一家

「優勝カップを手にする！」という私にとって初めての経験が、その後の私の学生生活、そればかりか人生（？）までも決めたような気がします。あれは、関大に入学して間もない

6月の西日本学生レスリング春季リーグ戦のことでした。当時は、部員も不足気味で、柔道部の先輩に助っ人をお願いしてる状態だったし、成績も2部の真ん中あたりということでした。ところがいざ試合が始まると、どういうわけか勝ちつづけ、何と「2部優勝」という思いがけない結果になっていたのです。

そのときの感動の大きかったこと。喜びを胸に、高島屋のビアガーデンへ。優勝カップにビールを注ぎ、祝杯をあげました。ビールの味なんてわからないけれど、とにかく美味しかった。優勝カップで飲んだのは、後にも先にも、このときだけで、いまだに忘れられない思い出です。女子マネージャーとして参加した私は、この試合がきっかけとなり、そのままレスリング部に、そして体育会にどっぷり浸かった学生生活を送ることになったのです。

入学当初の私は、考古学にあこがれて、考古学教室に通う真面目な（？）学生でした。それが先輩に声をかけられ、体育館に連行され、しゅしゅ

試合の応援に行ったのが運のつきとでも言いましょうか。考古学なんて、あっという間にどこかへ行ってしまいました。レスリングのことなんて、何も知らなくて、オリンピックで日本が強い種目、昔の水着のようなものを着て、マットの上で転がるスポーツと思っていたので、初めて練習を見たとき、「フォールって3つたたかないんですか」と質問し、笑われました。その後、私自身が多くのの人から同じ質問をされました。

そんな私が、レスリング部という男子学生ばかりのクラブで、マネージャーを4年間続けられたのは、先に書いたように、優勝の感動が忘れられなかったことのほかに、素敵な先輩や仲間に出会えたからだと思います。体育会という縦の関係が厳しいイメージがありますが、我が部はとても民主的で、個性派が多く、練習後のひとときも私にとっては楽しみでした。OBの方々は、当時の私から見れば、ごっついオジサマ（ごめんなさい）ばかり。でも、OB会に寄附をお願いしたり、随分と生意気なことを言ってたにもかかわらず、とてもやさしくして頂きました。選手たちにとっては、マットの鬼のような〇〇先輩も△△先輩も…。

「レスリング部のマネージャーをしています」と言うと、驚きの目で見られることも多かったのですが、ゼミ（史学科地理学専修）では、それゆえに成績が悪くても認められてたようなところもあり、得をしたかな。レスリング部に入ったお蔭で、充実した学生時代だったと思います。

卒業後、私は香川県に帰り、4年間、小学校教師をしました。子どもたちにレスリングの話をすると結構おもしろがって聞いてくれました。時には、言うことを聞かないと投げ飛ばすと脅かしたことも……。教頭先生と雑談中に、マネージャーをしたことを話すと、「それで男の子の扱いがうまいだね」と褒めて頂いたこともありました。

結婚後は専業主婦ですが、子どもが幼稚園に入ってから、ずっとそこで役員をしています。いまも小学校の運営委員長（PTA会長のような役）として、何やら慌ただしい日々を送っていますが、私の根底には「関大レスリング部のマネージャーを4年間続けた」ことに裏打ちされた自信のようなものがあると思います。人にも、胸をはって自慢してますしね。

現役のときに30周年を迎え、今度は、50周年。時の流れを、感じます。

仲間の一人と結婚した私は、ふと、あのとき先輩にレスリング部のマネージャーにと声をかけられなかったら、どんな人生を歩んでたのだろうと思うことがあります。出会いとは、不思議なものです。（昭和54年卒）

〔編集部注解〕

旧姓則包京子さんが結婚した仲間の一人とは、同級生で主将を務めた西川雅弘さんです。やはりかつての上司である教頭先生が見抜いたとおり、当時から、男性の扱い方が上手だったのでしょうか。盟友関西学院大学レスリング部にも、主将と主務のカップルが誕生したケースがあります。昭和39年卒の小西輝夫さんと、同級生の甲藤純子さんと結婚しました。彼女は、たしか、女子マネージャーの第1号だと思います。その頃、かの八田一朗会長の娘さんも、立教大学で、レスリングのマネージャーをしていまして、当時のレスラーたちの憧れだったようです。我が「則包」さんも、我が部にとって、第1号の女性マネージャーでし

た。彼女の働き振りは、夫君に聞けば、一目瞭然でしょうね。その彼女を『関大スポーツ』がインタビューしています。タイトルは「初的女子レス部員“禁制”破ったマネージャー」となっていますが、そのままを引用しておきましょう。

◇

「なにかに打ち込んだ学生生活」を、と言われて久しいが、終わってみると、ただ、なんとなくの4春秋。則包京子さんの場合は、栄光のレスリング部一筋、まさに、わが青春に悔いなし。「最初は、三つたたくプロレスのイメージでみられ、いやだったワ。オリンピックの（金）メダリストまで出したわが部だ、と思いなおしても。1回生の秋に部が1部昇格してからは、もう夢中でした!! 私はマネージャー。各種の提出書類づくりや、試合のメンバー交換、ときには練習時にタイムも計る。試合当日は、朝5時に起きて、20人分のおにぎり、肉と野菜の煮込みスープをつくる。飲み易いイチミツ入り紅茶も。部員はもとより、OBの方も、初めての女子部員というので、やさしかった。西川雅之（法）、宮田有恒（商）、野口泰正（法）、吉原邦彦（工）、佐藤良輔（工）の5君とも、最後まで部をやめず、ここまでこれたことがうれしくて。学友会がないでしょう。運営のオカネにこまりました。試合出場にも協力金がいる。OB会からの年間30万円の援助金が頼りでした。」香川県丸亀高校の出身。下宿生活の中でのクラブ活動。家庭教師のアルバイトもした。といって、猛女でない。ほんに小柄な、おとなしい女子学生。ナウな顔だち。

◇

この年（昭和53年）の春も、主将西川や副将宮田ら4年生5人の奮闘で、2部優勝1部復帰を果たしている。秋には残念ながら1部の6位に。でも実力的に堂々としてました。則包マネージャーの内助の功いかんや。それにしても、西川さん、部を辞めなくてよかったですね。

（完）

〔思うままの記〕

ちょっとした有名人に

鷹巢 啓二

今回、記念すべき『関西大学レスリング部50年史』刊行に際し、執筆させていただけることは無上に名誉なことと感謝しております。とはいえ、文才のない私にとって、「レスリング経験を基盤とした現在の仕事の立場から」という編集部の注文「テーマ」は難しくて、なかなかペンが進みません。そこで一捻りして、手を抜くわけではありませんが、社内報に掲載された記事をお届けさせていただきますことにします。私が勤務する「第一製薬」の社内報「ザ・だいいち」で、社員のボランティア活動を紹介するコーナーに、私の記事が掲載されました。その記事を次に引用しておきます。



私は島根県立武道館でレスリングの指導員をしている。担当医師（編集部注：鷹巢さんは営業担当）の息子さんがレスリングをやっており、私も元レスラーということで、ドクターより声をかけられたのが、きっかけだった。

久しぶりにマットに立ち興奮し、指導員達のレベルの高さに驚き、消えかかっていた闘魂に火がつき、通うことにした。

武道館では、幼稚園児から中学生までを対象に、週2回指導している。私は、小学生の中級クラスを中心に担当しているが、これまで小学生への指導経験などまったくなく、苦労した。練習中、子供たちの集中力は持続せず、すぐに遊んでしまう。なめられてなるものかと怒鳴れば、私の大阪弁が珍しらしく、逆に笑いを誘ってしまう。もうこんなガキ知らんと思うが、子供たちが試合前に緊

張で震えている姿、負けていても最後まで諦めないマット上の雄姿、負けたときの悔し涙を見ていると、なんとか勝たせてあげたいと思う。

こんな子供たちもやる気を出し、だんだん力がついてきた。全国大会でも優勝者が続出し、団体戦では全国準優勝を果たした。なかには、ジュニア世界選手権大会で上位の成績を収めるものもでてきた。子供のたちの夢は、オリンピックの金メダリストと大きく膨らんできている。

それに比べ私は指導員として半人前で、満足な指導ができていないか不安であった。



写真▷「92国体で（右が鷹巢さん）」

ある日、父母から、子供たちの間で、自分のファンクラブがあることを教えてもらったときは、片思いと思っていた人から愛を告白されたような気分です、嬉しかったです。未熟な指導員ですが、期待にそえるよう精一杯努力したいと思う。

最近、楽しみも増えてきた。島根県選抜チーム

と私の母校「関西大学」の部との合同合宿が2年連続で行われ、交流が盛んとなった。また武道館を卒業した教え子も、高校生となり、去年は一緒に国体出場を果たした。いつか、教え子に「先生も弱くなりましたね」とフォールされる日を夢見て、その日まで現役にかかわり、子供たちとレスリングを楽しみたい。(鷹巣エッセイ・編集部注：「未来の金メダリスト育成を夢見て」と題する鷹巣啓二さんのエッセイの掲載写真をそのまま転載しました。)



これだけ社内報に大きく載ると、社内では、ちょっとした有名人になります。社外でも、レスリングのお蔭で名が売れることが多いようです。私の職種は、医薬情報担当者といって、医薬品の営業部門の仕事をしています。営業はまず、自分を売り込むことから始まります。いかつい体で、耳がつぶれている男が訪問すれば、弊社以外の営業マンよりも最初に大きなインパクトを与えることができるようです。そして「どんなスポーツをやったの？」とおきまりの質問を受けて、「レスリングの鷹巣」とすぐに覚えてもらえます。この業界は体育会出身の人間は珍しく、薬剤師や理系出身者がほとんどのため、レスリング経験者の私など異質な存在のため、それだけで注目度十分、「つかみはOK」という感じです。

こんなふうにレスリングが社会に出て役立つと

は思っていませんでした。営業の基本の「体力」は、恐怖の夏合宿をはじめ日々の練習で身につけました。精神力は、厳しい減量やリーグ戦の闘いを経験して、強くなりました。素人軍団でも(編集部注：この当時の部員はそのすべてが大学から始めた初心者である。)、西日本リーグの1部3位になることができて、やればできるということを教わりました。「レスリングの鷹巣」と社内外で自分の存在感をアピールできました。社会に出て、人様に誇れるような活躍をしているわけではありません。負けず嫌いで、体力には自信満々で、少々のことにはめげず、女性にはもてないが、社会人一般からはそこそこに信頼を寄せられているというキャラクターで、精一杯頑張っています。この私の「キャラクター」は、関大レスリング部で身につけることができたものと確信しています。それゆえ、関西大学レスリング部を創設し、素晴らしい伝統を作ってくださいました諸先輩方、また、その伝統を受け継ぐことを目標にして、苦楽をともにしてきたチームメートに深く感謝いたしております。

最後に、関西大学レスリング部とOB会が、今後ともますます発展することと、私がOB会や現役の練習に参加できる至近距離に転動しうることを祈念しながら、ペンを置きます。

(昭和60年卒)

マメ知識

レスリングにも「水入り」がありました。ご存じですか。



規定の三〇分ごとに勝敗がつかなかった場合にはその都度延長戦に入るレスラーに日本相撲でいうところの「力水」をつける役割が少年たちに与えられていたのである。少年たちは競ってその役割を担った。その少年たちを「アクワリアス」と当時呼んでいた。アクワリアスたちは手桶一杯の水を用意して延長戦に入る選手を元気づけるために選手の頭からその水を振りかけたのである。そしてその手桶一杯の水がなくなるほどに延長戦が続けば、人びとはその試合を偉大な試合だと褒めたたたえた。水を振りかける少年は無我夢中になる……。

〔思うままの記〕

社会人大会デビュー戦顛末記

安田 忠典



「レスリングが好きです」なんて、うっかり漏らすと変人扱いをうけてしまう。相手がレスリング経験者なら、なおさらである。彼らはすべてを身をもって知っているからだ。苦し

い練習、つらい減量、怖い先輩、耳がつぶれる、そして地味、おまけに女性にもてない。そう、何ひとつ良いことがないのである。にもかかわらず、「レスリングが好きで好きでたまらない」という変人たちを多く輩出する奇怪な「教団？」が、大阪府吹田市に実在する。その名を関西大学レスリング部という。

四半世紀ほどまえに競技成績優秀者の推薦入学制度を失ってから、毎年数名ずつ信者を送りだしているにすぎないが、その一部の狂信ぶりはただごとではない。せっかく無事に4年間の競技生活を終えたのにもかかわらず、仕事が終わってからトレーニングし、休みの日には嬉々としてマットにあがる。母校から遠く離れた土地に赴任すると、かの地の有力チームへ道場荒らしに行く。国体に出場したりもする。後輩の強化合宿に徒党を組んで現れ、強くなった後輩たちの技を受けて押さえ込まれ歓喜の呻き声をあげる。夜ともなれば、鯨飲馬食の酒池筋肉林？、高歌放吟、阿鼻叫喚の地獄絵図が展開される。これでは変人扱いさ

れても仕方がない。聞くところによると、彼らのような異常に元気なOBは、半世紀におよぶ歴史を誇る教団の「名物」であるらしい。そして近年、誰からともなく彼らのことを「レスリング中毒」、略して「レス中」と呼ぶ。

そしてこの「レス中」たち、「今年は我が関大レスリング部創部50周年だ！」「めでてエ、めでてエ」と有り余る体力にまかせて悪のりし、ついに、全日本社会人選手権大会の団体戦に出場するという暴挙に出てしまった。もはや誰にもとめることができない状態である。さてさてその顛末や、いかに。

試合前日、駒沢体育館の計量会場に集まった「レス中」メンバーは、鷹巣（昭和60年卒・今回76キロ級）、津田（昭和62年卒・今回58キロ級）、安田（平成3年卒・今回69キロ級）、相田（平成4年卒・今回63キロ級）、徳田（平成6年卒・今回76キロ級）の5名。「あれエ、関口さんは？」大変だ。「今回+76キロ級にエントリーの関口（昭和60年卒）さん」がいない。自宅に電話してみると、「えっ、計量日は明日と違うの？」なんていう連絡ミスもあった。翌日の対戦相手は、幾多の日本代表選手を輩出している名門中の名門「鹿児島商工高OBチーム」に決定している。ポイントゲッター抜きで勝たしてくれるほど甘くはない。一抹の不安が間抜けたレス中たちの分厚い胸をよぎった。

その夜、遠征組の安田、相田、徳田の3名は新宿のビジネスホテルに泊まった。が、なぜか3人

同室。学生時代の試合や合宿が思い出され、はしぎまわる。T田「買い出しにいきましょう！買い出し」、Y田「H本買おうか？」、A田「試合前にそーゆー事すると、腰がだめになんですワ」、T田「えっ、腰使うんですか？」、A田「えっ、使えへんの？」、T田&Y田「……？」。多分明日はダメだろうな……。

決戦の朝。関口も気をとりもどし、二世を連れて応援団を引き受ける。さらに有藤（昭和62年卒）も仕事の合間をぬって駆けつけた。いやおうなしに気分は盛り上がる。やはり、この緊張感はたまらない。ここで鷹巣と徳田のどちらが76キロ級に出場するのか、ジャンケンで、決める。負けた徳田曰く、「予選落ちか……」。

先発は津田。10年ぶりのマット。相手は卒業間なしの若手、善戦むなく惜敗。しかしその積極果敢なファイトは、みなを大いに盛り上げる。この時点で、もう後がない。が、そんなことに気づく冷静な奴はひとりもない。続いて相田が出る。抜群に巧い組み手と、しつこいグラウンドで相手を寄せつけない。完勝である。3番手は安田。一番練習環境が良いはずだが、何かおかしい。病み上

がりで寝ぼけているのか、足技にいつては、自分がこける。巻き技にいつては、自分がねる。あげくのはてに、思いっきり飛行機投げまでくってしまう。完敗である。これでチームの負けは決まったが、最後の鷹巣がまた強い。正面からタックルに入れば場外まで一気にもっていく。グラウンドでは必殺腕取りアームバーがきまる。一方的に「激勝」して、大いに気を吐いた。

こうして社会人デビュー戦はほろ苦い敗戦となってしまったが、せつかくこれだけ集まったのだからと、打ち上げに行くことにする。駐車場でも興奮さめやらぬ面々は、各自練習して次回必勝を誓い合う。関口が車を準備するあいだに、なんと上半身裸になって鷹巣が腕立て伏せを始めた。関口が「オマエ！何してんねん」、鷹巣は「いやあ、できるときにやっとかんとナ……」、一同は「！？！？」。みな空いた口がしまらなかったが、徳田だけは既にスクワットの態勢に入っていた。そのあとの打ち上げが、どうなったのか、読者のご想像におまかせします。文中敬称を省略しました。（平成3年卒）

マメ知識

一九一三年のベルリン会議で、ルールの統一化が始まります。その主眼は二つありました。

一、十一時間にも及ぶ試合時間を余儀なくするルールをどうにかできないか。運営の課題。

二、国際スポーツ化を目指すためにはルールの統一が必要である。普及の課題。

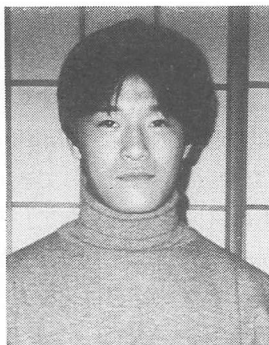
しかし当時の大衆は試合時間の短縮を好みませんでした。何時間にも及ぶ試合に熱狂して喜んだからです。観衆は延長戦のたびに興奮を重ねました。（前出の「水入り」を楽しんだのである。）

統一ルールが守られなかった理由はほかにあります。一九二八年のアムステルダム会議に至るまで印刷物となった公式ルール・ブックがなかったのです。それではレスリングが国際化しませんでした。試合時間二〇分。最初の一〇分間を優勢だったレスラーが、続く一〇分間をスタンドで闘うか、三分づつ交代のグラウンドと最後の四分のスタンドを選択するかの権利をもつ。フォールで試合は最終する。五本のバッド・マーク制。これが最初の公式ルールでした。そうなるは一変しました。国際スポーツとしての位置づけが確立したからです。こうして近代レスリングは発展します。

〔思うままの記〕

少年レスラーを育てています

齊藤 正志



私がレスリングで得たものは何であろうか。また現在の生活でレスリングが礎となっているものは何であろうか。この原稿を書くにあたり改めて考えてみた。

判らなかつた。判らないというより、なんだか漠然としている。部室のある2階から見下ろしたマット、先輩たちがスパーリングをしている後ろ姿、そして体重計が思い浮かぶ。

私がレスリングをしようと思ったきっかけは高校時代に校内柔道大会で優勝したことであった。ただ大学から柔道を始めても通用しないだろうから、マイナーなレスリングならという甘い考えで入部した。練習は初めの頃は易しかった。そして例の夏合宿が始まる前から鬼のような練習になった。そしてそれまでの私の生活からは信じられないような近江の夏合宿。脱走者も出た。入部してから半年で練習が大嫌いになり、結局4年間練習は嫌いだった。

多分格闘技とはそういうものなのだろう。練習で楽しいと思えることは殆ど無い。そんな練習を毎日続ける。試合の数週間前から8kgの減量。練習だけでは体重が落ちず、夜、体にカイロを巻き付けて走る。途中、コーラでうがいをする。多少の目眩。家に帰って体重を量るが、殆ど落ちてい

ない。真夜中にサウナに行く。さらに目眩。殆ど落ちない。そして練習は試合前日まで続く。

それでもレスリングは好きだった。なぜならこれらの苦勞がすべて報われる強烈な瞬間があったからである。試合直前に対戦相手が向こうのコーナーに見える。相手は首や手首を回しこちらを見ている。強いのだろうか、弱いのだろうか。意味のない想像が膨らみ、便意を催す。そんなことを考えているうちに呼び出され、試合の笛が鳴る。試合中も楽しいことは何も無い。息が切れて頭がもうろうとする。私は技が特別に切れていたわけでもなく、途中からは気合で戦う。「モウダメダ」「イヤ、アキラメルナ」「モウダメダ」「イヤ、アキラメルナ」……「あきらめるな!」。こんな心の葛藤を乗り越えて勝利する。頭がもうろうとするなか、レフリーに手を挙げられる……この瞬間、いままでの嫌な練習が帳消しになり、また試合前の緊張が吹っ飛んでしまう。勝利までの過程が困難であるからこそ、そう、まるで1年間オ〇〇を我慢してから発射するごとく、その快感は格別なものであった。

大学を卒業してから3年、誰でもそうであろうが、現在は学生時代とはかなり違う生活となった。就職もした、結婚もした。僅か3年ではあるが、普段使わないホルモンをドッと出し、感情を爆発させる、そんな特別な瞬間に出会うことも無くなった。殊更、教員という職業柄まわりの人間は出る杭を嫌うようで、私自身もそういう環境に慣れてしまったのかもしれない。あのころが懐かし

く思われる。ある先輩が言っていた。「関大レスラーは会社に順応できないから、お呼びがかかる」とみんな喜んで集まる」と。多少の冗談はあるものの、私もその言葉が判るようになってきた。

先日、吹田の円満寺で、先輩や同輩、後輩が私の結婚式の2次会をやってくださった。酒乱のF先輩は相変わらず怪しかったし、サドのH先輩は新婚のストレスからか更にサドに磨きがかかっていた。お腹の大きなK先輩はまた大きくなったようだった。毒舌のK先輩は舌に毒キノコを培養していた。みなさん本当に相変わらずで、嬉しくなった。

いま思えば我々の先輩、後輩の関係は何か不思議なものだった。部員が少なかったということも多分に関係があるのか。先輩、後輩というよりは兄、弟のような関係に似ていたように思える。在学当時、私の服がみすばらしかったため、ある先輩が服をくれた。「これやるわ、ポケー」。翌日もらった服を着ていくと、「何、着とるんじゃ、ポケー」。みんな恥ずかしがり屋で、優しかった。私がレスリングで得たものが漠然として判らない

と先述したが、はっきり断言できることは素晴らしい先輩、同輩、後輩を得ることができたことである。

関大レスリング部も創部50年、時は流れている。モノの見方も変わっている。昔の先輩方が我々の様子を見て、何と甘っちょろいことをやっているのか、と思ったことだろう。ただ、それでも私にとっては感情をぶつけ、頂点の快感を味わうことのできた時間であり、また生涯にわたるであろう先輩、同輩、後輩に出会えた時間でもあった。現在ひょんなことから地元金沢で、ちびっ子レスリングを指導している。厳しい練習をするとすぐ辞めるので、ゲームを取り入れたり、ドッジボールをしたり、と何のクラブやら判らなくなっている。「いまの子どもは、甘っちょろいなア」とおもわず思ってしまう。私もいい歳になったのだろうか。もう少し頑張って、あの頃の快感を少しでも多くの子どもに感じさせてみたい。

今後とも関大レスリング部が素晴らしいクラブであり続けることを願っています。

(平成7年卒)

マメ知識

レスリング競技における試合時間短縮の変遷史には、明確なエピソードがあります。それは、一九八四年のことです。それまでと、それ以降とは、試合時間短縮の背景になった理由が根本的に異なるからです。一口に言えば、それまでは自律的に変更してきたのですが、それ以降は他律的に変更せざるをえなくなってしまったのです。テレビ・パワーが律する傾向を見せはじめたからにほかなりません。

衛星放送によるテレビ放映が威力を発揮したのは、実に、一九八四年の東京オリンピック大会からでした。お蔭で東京オリンピックは大成りに終始しました。けれども当時からしばらくのあいだは、このテレビの威力も歓迎すべきものでした。ところが一九八四年の第二十三回ロサンゼルス・オリンピック大会から様相が激変することになります。

このロサンゼルス大会こそは、オリンピックがビッグ・ビジネスになるとの観念をはじめてもらいます。それはロサンゼルス五輪組織委員会が膨大な利益を計上することに成功したからでした。その利益には、すべてテレビが介在しています。……このロサンゼルス五輪現象が、テレビの、スポーツツール変更への介入を促進する契機となったのです。